

双ヶ岡に鐘鳴りて

山城4回 三中西 久 雄

JR嵯峨野線の花園駅を降り十分足らず歩くと「双ヶ岡」一の丘の登り口に着く。双ヶ丘は三つの丘が南北に並び一の丘が一番高く海拔百十六mあり、三の丘が一番低く七十八mしか無い。

双ヶ岡には古墳時代後期（六世紀～七世紀初期）の古墳群がある。一の丘の頂上はちよつとした広場になっており、須恵器・土師器・金環などが出土している。玄室の規模は長さ六・一m、幅三・六m、高さ五mあるが崩壊の危険があるため埋め戻されている。

二の丘頂上から北へ下がった地点からは、比叡山、大文字が眺められる。また、春に登ると御室のさくらの眺めがすばらしい。

一昨年の四月七日に同期生の乙部氏の企画で同期生希望者三十名ばかりで、この双ヶ岡から仁和寺へハイキングをしたおり、一の丘の広場で眼下に御室のさくらを眺めながら山城の校歌を皆で歌った思い出がある。

この双ヶ岡は昭和十六年十一月に国指定の名勝となった。双ヶ岡の登り口には〈名勝双ヶ岡〉の石碑が建っている。

今は「双ヶ岡」という字を使っているが、元々は「雙ヶ丘」が正しいようである。

徒然草の作家で平安時代の歌人でもある古田兼好の歌に「契り置き花と雙びの岡のへに哀れ幾世の春を過こさむ」と詠われている。

この「双ヶ岡に鐘鳴りて……」で始まる山城高校の校歌は我々山四回生が入学した昭和二十五年四月時にはまだ無かった。

山城の校歌が出来たきっかけは二十五年の夏、初めて野球部が甲子園に出場したが校歌が無かった為、校歌を作る事になったと記憶している。

我々が二年生の時に校歌が出来、体育館で何回か練習をさせられたが練習をサボッタ者が多く、うる覚えで卒業した者も多かったようである。私もその一人であったが、卒業して五十五年経った今、二年に一度開催している同期会で何回か歌っているうちに覚えられたようである。

